

町全体で取り組む ICT を活用した授業づくり

— ICT 教育推進のための組織づくりとサポート体制の構築 —

唐澤久樹（長野県箕輪町教育委員会 学校教育課指導主事）

概要：箕輪町では「ふるさとを愛し、自らの人生を切り拓いていくことができる人の育成」との教育大綱を定めている。そして学校教育の重点として、自己肯定感の育成のための「グレードアップ・プラン」への取組とともに、「分かりやすい授業づくり」に向けた ICT を活用しての授業づくりとその研修に取り組んできた。本町が取り組んできた ICT 教育の環境整備・人的配置とともに、推進のための組織づくりやそのサポート体制について報告したい。

キーワード：ICT 推進委員会, ICT 教育支援員, 自主的研修, 授業改善

1 はじめに

箕輪町は、ICT環境の整備とともにICT支援員を配置し、「授業改善」を中心に据えながらICTを活用しての授業づくりに取り組んできている。その取組の中で、県のパイロット校の指定を受けるとともに、昨年、11月には、長野県ICTシンポジウムが箕輪中学校で開催された。県内外から約170名の参加者が訪れ、授業の中でさまざまな機器が自然と活用されている状況に高い評価を得た。箕輪町全体で取り組んできたICT教育の推進は県のICT教育を牽引してきたと言える。



ICT教育推進の最も大きな成果のひとつは、ICTを使うことで日頃の授業の曖昧さが見え、そこから教師が普段の授業を見直す良い契機になっていることである。それらの取組の様子を紹介するとともに、推進上の課題にどのように向き合い、解決を図ってきたか。

また、その中で見えてきたことや児童生徒の変容、さらには教職員の姿勢の変化などについて、示していきたい。最新の機器に触れながら共に学び、高め合う「箕輪の子ども」を育成するための本町のICT教育推進の取り組みを紹介したい。

2 事業内容

(1) 本町の ICT 教育機器の概要

箕輪中学校(775)→iPad(140台),大型TV(各教室)電子黒板(4),デジタル教科書

町内各小学校(5校)

→担任用 iPad,(77台)大型 TV(各教室),電子黒板(1),デジタル教科書



(2) 特徴的な取り組み

- ① 中学校に ICT 支援員を配置(H26~28)
- ② 町 ICT 教育推進委員会の設置(年 4 回)
- ③ 第 1 回箕輪町 ICT セミナーの開催(10/28)
- ④ 情報通信「歩一歩」発行(昨年 98 号)
- ⑤ 他県の先進地、全国的研究会への参加

(3) 支援員の配置とその取り組み

町では、ICT教育の牽引役として、ICT教育支援員を H26 年度より中学校に配置した。人選にあたっては、「よい授業ができる人」を条件とし、機器を活用して授業改善を推進できる教員をあてた。支援員の仕事は、概ね以下のとおりである。

- ① 授業づくりへの参画
 - 教材研究の相談 ○TT として授業参加
- ② 職員研修の企画・実践
 - ミニ研修会の企画実施 ○ICT 通信の発行
- ③ その他、

○先進地研修への参加と各校への啓発

○ICT 機器導入と維持管理

(含：デジタル教科書)

(4) ICT 教育推進委員会の設置と活動

H26 年度、デジタル教科書導入と iPad 導入を契機に、町内各小学校の ICT 教育推進のために「箕輪町 ICT 教育推進委員会」が設置された。趣旨は、

○ICT を活用した日常の授業における具体的な実践事例についての情報交換

○ICT 教育の充実のための ICT 活用の研修以上の 2 点であり、年 4 回の会議には、アドバイザーとして、県教委の ICT 教育担当主事や総合教育センター主事も参加し、意見をいただいている。

(5) 第 1 回箕輪町 ICT セミナーの開催

昨年度実施の県の「ICT 教育シンポジウム」を町独自で発展させ、上記推進委員会事業の一環として、今年度 ICT セミナーの開催を予定している。中心講師に、東京学芸大の高橋 純准教授を招き、各校の授業実践を通して研鑽を積む予定である。

(6) 「ICT 通信」「歩一歩」の発行と啓発

支援員は、中学の ICT 機器活用の様子や生徒の状況を中心に通信を発行し、町内の各小学校教員の意識高揚を図ってきている。

また、町教委配置の教育専門官 (H26～27) 指導主事 (H28) は、教職員の研修や学力向上を中心的に担うが、その一環として、各事業や学校の授業の様子などを先生方に発



信する通信「歩一歩」の発行を行ない、「他校の実践に学ぶ」機会となっている。

3 研究内容

(1) 「眠らせず、みんなで、日々、少しずつ」

町では、推進委員会を中心に、ICT 機器を活用しながら授業改善を図ろうと標記テーマを決め、取り組んできている。以下に、その取り組みの具体を示す。

① 「眠らせない」ための工夫

○既存の ICT 機器をフルに活用していく工夫

- ・大型テレビの活用
- ・小の iPad の活用・・・書画カメラとして活用できるフレキシブルアームを 35 台配置
- ・デジタル教科書の活用・・・「わかりやすい授業」づくりのために有効に活用していく。

・電子黒板の活用

○配慮点

- ・どの教室でも、同じ位置に、同じ ICT 機器が設置されている環境をめざす。

② 「みんなで、日々、少しずつ」進めるための手だて

○日常的な ICT 活用をめざして【小・中学校】

- ・朝のうちに、職員室のノートパソコンを教室へ持ち込み、電源を立ち上げてデジタル教科書が利用できる状態にしておく。
- ・iPad を書画カメラ的に利用できるよう、フレキシブルアームに設置しておく。
- ・5 教科では、できるだけデジタル教科書を有効に使う。
- ・「ここぞ」という場面での iPad の活用を教科会で検討し、実践する。

(2) 積極的な取り組み

支援員を中心に ICT を活用した授業づくりを進めてきた箕輪中では、以下の ICT 教育の三本柱が定まり、活用方法が焦点化されることで、授業づくりの方向を共有しながら、取り組んできている。

【ICT教育の三本柱】

- ・情報の見える化
 - 大きく見せて視覚的効果を図る
- ・協働型・双方向型の授業
 - 支援ソフト活用により徒同士の伝えあう力を育む
- ・個別学習ソフトの活用
 - 「ラインズ」活用し基礎の定着を目指す

その取り組みを経て、教員の中に意識の変化が現れてきている。その主なるものは、以下の2点である。

【デジタル機器を使う「ずく」を出す！】

あれがないからできない、もっとこれがほしいと言う前に今あるものをフルに活用すればこんなことができるぞ、という発想で取り組もうという意識

【ミニ研修会-ICTちょこっとやろう会の実施】

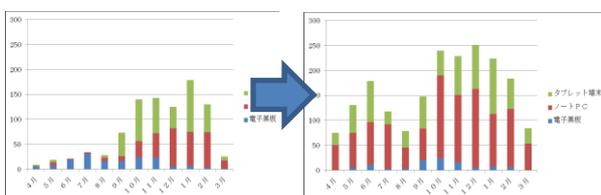
先生方の自発的な研修の場として、ミニ研修会を行おうという意識年度当初は、新しく赴任した先生方を対象に、(わかる人が教える、見せる)研修として実施し、できるときに、参加できる先生方の研修が位置づいてきている。また、この動きは、町内の小学校にも波及し、各校での自主研修の場が位置づいてきた。



3 結果

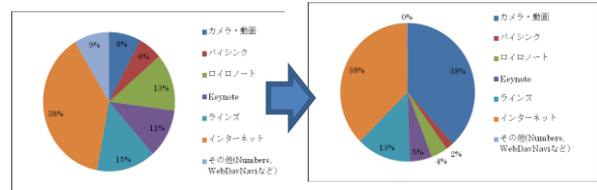
(1) ICT機器活用率の向上

その取り組みを経て、機器活用の授業時数が下表の通り大きく増加しH27年度には、年間2000時間を超えてきている。[下表参照]



また、iPadの活用用途の広がりも覗える。

[下表参照]



(2) 生徒の学習への取組

授業にICT機器を活用する中で、児童生徒の学習への取組に以下のような変化が生じてきた。
○視覚的な資料をもとに、生徒同士の話し合い活動が活発になり、内容の質的な深まりも見られた。

○タブレット端末での記録、再生を通して、理科の実験の様子を何度も見たり、体育の実技を自己評価したり、更に友だちの取組の様子を共有するなど追求時の意欲が増した。

○自分で録画した内容をもとに、全体に発表するなどの活動を通して、コミュニケーション力の向上が感じられる。



(3) 教師の意識の変化

ICT機器を活用した授業づくりは、今までの自分の授業を見直すことにつながり、授業そのものの改善を進めようという意識の変化がうかがえる。

① 授業づくりに対する教師の意識変化

- ・撮影時や見るときの視点を与える
- ・発表や学び合いの土台づくり
- ・記録として生徒に残す板書の充実

② 「ここぞ！」を考えた効果的な機器活用

- ・タブレット端末で自分を客観視し、友と学び合うことで技能・表現が劇的に向上

4 考察

○ICT環境の整備とともに、ICT教育支援員の人的配置が、各教室での使いやすい環境づくりや教員の関心を高め、自発的な研修が行われることで、授業への機器活用が飛躍的に進んだ。

○ICT支援員に求められる素養は、機器の使い

方や接続に習熟していることは基本であるが、それとともに校内の研修を組織していく企画力、そして、授業改善の視点をもって、授業づくりを進めることができる確かな授業力が大事である。

○授業での機器活用がきっかけとなり、教師自身が自分の授業を振り返りながら、より有効な活用方法を考えることで、授業そのものの改善につながってきている。

○町内各校の ICT 教育推進のためには、推進委員会の組織が大きな役割を果たしてきている。

各校の委員が中心となって、子どもにとって有効であった具

体的な活用例を紹介し合うことで全町の教員の意識が高まった。



○県のシンポジウムの実施やセミナーの開催が、全国的な動向や実践を理解する大事な機会となり、意識化を進めてきている。

5 結論

① 先進地に学び、町内につなげる

本町の ICT 教育の推進は、教委の指導的職員(専門官)と ICT 支援員の配置とともに、中心となる職員が積極的に全国の先進地を視察研修してきたことがベースになっている。そして、町内に支援員を中心とした組織づくりを行い、各校の ICT 教育推進のリーダー育成がポイントとなった。

② タイムリーな情報発信と自発的な研修

ICT 支援員発信の「ICT 通信」は、中学校の機器活用の実際や中学生の取組がタイムリーに発信され、町内の先生方にとっては、参考になるとともに良い刺激となってきた。機器の使用が特定の先生に限られていた状況から、すべての先生が使おうとする雰囲気づくりを助けている。さらに、その中で自分たちの授業づくりのために、自発的な機器活用の研修が行なわ

れるようになったことも大きな成果のひとつである。

③ ICT 機器活用の目的は「授業改善」

教師は、機器を活用することで授業の効率化や焦点化が図られ、使い方によって子どもたちの意欲を喚起することを感じている。また、それとともに、より有効な機器活用を考えること自体が、授業改善につながることも実感してきている。ICT 教育の推進は、授業づくりへの教師の意識改革がポイントであり、正に「授業改善」である。



6 今後の課題

本町では、中学に引き続き、来年度町内各小学校児童用のタブレット端末環境の整備を計画している。中学校での実践から示唆された、機器環境の整備や職員の研修のあり方、何よりも教師自身の授業改善の意欲づくりなどを、小学校の現場でも大事にしていくことが肝要と考える。ICT 教育支援員を中心とした町の推進委員会が機能しつつ、小学校での ICT 教育の本格的な推進が、今後の本町の課題である。また、小学校で基礎を作り、中学校で発展的な教育活動に繋げるための小中の連携も大事な課題となる。

